

1

動詞の種類

§ 1 自動詞と他動詞

CHECK

動詞は、本動詞/助動詞、be動詞/一般動詞、自動詞/他動詞、動作動詞/状態動詞、意識動詞/無意識動詞、定型動詞/非定型動詞などに大きく2分できる。これらの区別は疑問文・否定文の作り方や進行形にできるかどうかなどに影響を与える。

このうち、自動詞と他動詞は文型を左右する、支配する点でもものすごく重要である。目的語をとる動詞を他動詞、目的語をとらない動詞を自動詞という。後に名詞を置く場合に、他動詞は前置詞なしで置けるが、前置詞を必要とするのが自動詞である。自動詞+前置詞=他動詞のように考えることもできる。

英語の動詞はほとんどが自動詞と他動詞に用いられて、文型が決まる。自動詞だけ、他動詞だけの用法しかない動詞は少ない。**appear, happen**などは自動詞しかない動詞であるが、自動詞だけと思いきや **go, come, live** も他動詞として用いられる。

◇ **go, come, run, stand** の意味はときかたれて、「行く」「来る」「走る」「立つ」の意味しか言えないようだったら、高校生としてはかなり心許ない。

run 動 自	文型	「～になる」	run short of money 「お金が不足する」
	他	文型	「～を経営する」
			run a hotel 「ホテルを経営する」

stand 動 他	文型	「～を我慢する」
------------------	----	----------

次の例は **go** が他動詞として用いられている場合である。

A simple explanation would **go something** like this: when we eat or drink, the same nerves in the mouth react both to spicy chemicals in the food and to a rise in temperature. (センター試験)

(簡単に説明するところのようになるだろう。(簡単な説明はこのようになるだろう)私たちが食べたり飲んだりするとき、口内の同じ神経が食べ物の中の刺激物と温度の上昇の両方に作用するということである。)

Richard worked at the drugstore his uncle **ran**.

(リチャードは叔父の経営するドラッグストアで働いていた。)

Cat owners like their friends and pets to **live their lives** in their own way.

(猫の飼い主は友達やペットが自分自身のやり方で生きることを好む。)

EXERCISES

1 The government's decision was to taxes.

- ① rise ② have been rising ③ raise ④ be raising

taxes という目的語があるので、他動詞でなければならない。とはこの時点で消える。は税を上げること、は税を上げていることででは意味が通じない。rise, raise は自動詞と他動詞で形が変わる動詞である。このタイプの親分格とも言うべき、lie, lay は要注意。

rise	自	上がる, 昇る	rise-rose-risen
raise	他	上げる	raise-raised-raised

lie	自	横たわる	lie-lay-lain-lying
lay	他	横たえる	lay-laid-laid-laying

There they built their nest and **laid** their eggs.
(そこに彼らは巣をつくり、卵を産んだ。)

lay an egg は「卵を産む」、**lie** には自で「嘘をつく」という意味があり、この意味では規則動詞である。**lie-lied-lied-lying**

答 ③ The government's decision was to taxes.

訳 政府の決定は税を上げることだった。

2 I can't that noise. It's driving me crazy. (センター試験)

- ① keep ② put up ③ stand ④ stay away

stand には他動詞で「耐える, 我慢する」の意味がある。**put up** は **put up with** と **with** が必要である。同意語として **bear, endure** がある。

なお、**drive** はここでは「人を~の状態にさせる」という意味の第5文型の文を作っている。補語には、**crazy, mad, insane** などがくる。

答 ③ I can't that noise. It's driving me crazy.

訳 あの騒音には我慢ができない。気が狂いそうだ。

- 3 All the students [① studying abroad ② interested in ③ attend ④ should
⑤ the next week's meeting]. (センター試験)

次のような手順で考えていく。

まず動詞の部分を作る。 と は動名詞または現在分詞, 過去分詞なので be 動詞が進行形, 受身が作れるが, be 動詞がないので述部動詞にはなれない。

③ attend ④ should → should attend → All the students should attend

attend は選択肢のなかに前置詞がないので, ここでは他動詞で「出席する」の意味。直ぐ後ろに目的語がくることができる。attend the next week's meeting の部分ができる。All the students should attend the next week's meeting

① studying abroad ② interested in が残っている。

は現在分詞として, 形容詞句・副詞句を作るのに用いることができるし, 名詞のように用いることもできる。 を All the students studying abroad として使うと, が余ってしまう。そこで, を名詞のように用いることを考えると, 前置詞の目的語という考えが浮かぶ。interested in studying abroad。これで「外国で勉強することに興味を持っている～」という部分ができるので, 学生, 会議のうち, ふさわしい学生を修飾するようにする。All the students interested in studying abroad「外国で勉強することに興味を持っているすべての学生」という主部ができた。述部と組み合わせて次のような文が完成する。

答 ②①④③⑤ All the students [interested in studying abroad should attend the next week's meeting].

訳 留学に興味のある学生はみな来週の会議に出席したほうがいい。

attend には自動詞で, 「注意する」「付き添う」の意味があり, attend to A で「A に注意する」(名詞形は attention, pay attention to A : 「A に注意を払う」でおなじみ), attend on A で「A に付き添う」(名詞形は attendance, attend する人は flight attendant でおなじみ) の意味になる。

2

文型

§ 1 第1・2文型

CHECK

◇第1文型では、ここで取り上げた **there is[are]** 構文以外にも **It seems that** など重要な構文がある。修飾語がついている場合が多いので、修飾語によって、主語＋動詞の骨組みを見失わないようにしなければならない。

EXERCISES

1 When we arrived at the birthday party, nothing left to eat or drink.

- ① there were ② it was ③ there was ④ we were

《**There is[are]**＋(代)名詞＋過去分詞》は《(代)名詞＋**is[are]**＋過去分詞》のように考えると分かりやすい。

There was **nothing left** to eat or drink. → Nothing to eat or drink was left.

(食べたり飲んだりするための残されたものは何もなかった。)

→食べたり飲んだりするものは何も残っていなかった。)

答 When we arrived at the birthday party, nothing left to eat or drink.

訳 私たちがバースデーパーティーに着いた時、飲み物や食べ物は何も残っていなかった。

There were **a lot of food and drinks ready** on the table in the living room.

→**A lot of food and drinks were ready** on the table in the living room.

(居間のテーブルにはたくさんの食べ物と飲み物が用意されていた。)

◇**There is[are]**の構文は、現在形と過去形以外にも **There used to be**, **There will be**, **There has been** などバリエーションが豊富である。

In the past 50 years **there has been** a great increase in research on the brain.

(過去50年間に脳に関する研究の数は増大してきている。)

Once upon a time, **there was** a princess named Atlanta, who could run as fast as the wind.

(昔々、アトランタという名前の王女がいた。彼女は風のように速く走ることができた。)

CHECK

◇次の英文を用いて、構造による文の種類と文型について考えてみよう。1つの文における述語動詞と接続詞の関係で、構造上、単文、複文、重文、混文という文の分け方をすることがある。述語動詞が1なら単文、2なら接続詞の種類により複文か重文に、3なら混文の可能性がでてくる。be 動詞は、文型を考えると非常に便利な動詞だ。どんな長い文でも第1文型か第2文型になるので文の構造が把握しやすい。

EXERCISES

2 次の文の下線部(1)～(5)は第何文型だろうか。

(1) Who is the “I” that says “I remember,” and (2) where is he or she located?

(3) One way of looking at this question is to consider the remark made by René Descartes, “I think, therefore I am.” In his view, (4) the mind is something that controls the physical brain. However, (5) such a view that the mind is beyond or separated from the brain is still controversial. (同志社・神/法)

※このような複雑な文を読むためには文型、言い換えればその文を支配している動詞の使い方が重要になってくる。それでは(1)から(5)に共通している動詞は何だろうか。それは **is** である。これで、第1文型か第2文型にしぼられる。(SVOO が受身になっている場合を除いて)

答

(1) Who is the “I” that says “I remember,” and (2) where is he or she located?

最初の文は、等位接続詞 **and** で結ばれている。このような文は**重文**とよばれる。重文では2つの節は対等なので、前半と後半とに分けて考える。

前半の文は **Who is A?** の形をしていて、「Aは誰ですか」という第2文型になる。

後半の文は **Where is A located?** 「Aはどこにいるか」という第2文型になる。

he or she (A or B) が主語になると、動詞は **A** と **B** の近いほうにあわせるから、**he** にあわせて **is** になっている。

(3) One way of looking at this question is to consider the remark made by René Descartes,

A is to ~で「Aは～することである」。補語のところに来ているのは名詞相当語句(不定詞の名詞的用法)。主語・動詞の関係が1個所しかないのでこのような文は**単文**とよばれる。

(4) the mind is something that controls the physical brain

A is something で「Aはものである」。Cのところに来ているのは不定代名詞。補語になれるのは、名詞・代名詞・形容詞およびそれらの相当語句。この文は**複文**とよ

ばれる。複文とは主節と従属節からなる文である。補語を関係代名詞節が修飾していて、関係代名詞節は **SVO** になっている。文全体の文型を答えるときは主節がとっている文型で答える。

(5) such a view that the mind is beyond or separated from the brain is still controversial.

この文には **is** が2個所で使われている。すると主語+動詞の関係が2回あるので重文か複文である。もし、重文なら等位接続詞で2つの節に分けられる。等位接続詞の **or** があるので試しに **or** のところで2つに分けてみると、**such a view that the mind is beyond** と **separated from the brain is still controversial** となるが、いずれも頓珍漢な日本語になってしまってもうまく訳せない。これは、(5)の文が重文でないことを示している。**that** 以下が **a view** にかかる関係代名詞節ならば、修飾が終わったところまでが主部であるが、それはどこまでか。2つめの **is** の前である。

訳 「私は覚えている」と語る私は誰で、どこにいるのだろうか。この疑問を考察する方法はルネ・デカルトの「我思う、故に我あり」という言葉を考えることである。彼の見解では、精神は身体としての脳を支配するものである。しかしながら、精神が脳を超えているとか、脳から切り離されているという見解は今なお議論の余地があるところだ。

◆ **go** と **come** は、「行く」「来る」だけでは不十分だ。第2文型で用いられるときは「～になる」の意味になる。**come** は良い方向、**go** は悪い方向への変化を示す。

They could make one's wishes **come true**.

(それは (=魔法の長靴) は人の願いを叶えることができた。)

Things sometimes **go bad** but usually **come good** again.

(物事は時に悪くもなるが、またよくなるものだ。)

3 This TV set sometimes wrong without any apparent cause.

① comes ② does ③ goes ④ makes

wrong は形容詞なので、**SVC** 構文を作ることのできる動詞ということで、②の **comes** と③の **goes** が残るが、悪い方向への変化になるので③の **goes** を選ぶ。

答 This TV set sometimes wrong without any apparent cause.

訳 このテレビははっきりした原因もないのにときどき故障する。